

船井情報科学振興財団 第10回留学生レポート

Manners maketh man (from Kingsman: The Secret Service).

英国オックスフォード大学計算機科学科に所属しています、山田倫大です。現在は種々の報告をするには中途半端な時期であること、また留學生活の様子を知りたいという声があったことを踏まえ、本稿ではこれまでと趣向を変えて留學中に体験した催し物を幾つか紹介したいと思います。

ベリオール・カレッジ

オックスフォード大学は（ケンブリッジ大学と共に）英国の大学の中でも珍しいカレッジ制を採用しています。簡単に言えば、カレッジとは学生が寝泊まりする生活の場を提供する寮の役割と教育を行う大学の役割を併せ持った組織であり、オックスフォード大学は約40のカレッジを持ちます。一方、通常の大学の様にオックスフォード大学も学問分野ごとに学部を持ち、そこでも授業や試験が行われるため、それぞれのカレッジが完全に独立した大学としての役割を果たしている訳ではありません。学生は入学の際に学部のみならずカレッジを選び、両者の選考を通過する必要があります。カレッジ制の仕組みはやや複雑であるため、本稿ではその詳細を省きます。¹

私の所属するカレッジは1263年創立のベリオール・カレッジです。ベリオール・カレッジは最も伝統のあるカレッジの1つであり、これまで著名な政治家、科学者や文学者を輩出してきたことで有名です。日本の人々には雅子妃殿下が留學されていたカレッジとしても知られています。以下の記述は、私がベリオール・カレッジで体験した個人的なものであることをご了承下さい。



ベリオール・カレッジの中庭

¹ カレッジ制は小説「ハリー・ポッター」シリーズのホグワーツ魔法魔術学校のモデルともなりました。

創立750周年記念ボール

留学1年目の2013年にベリオール・カレッジの創立750周年を記念するボール²が催されました。ボールとは格式の高いダンス・パーティーのことであり、男性は燕尾服に白の蝶ネクタイ、女性はスカートが足元に及ぶイブニング・ドレスを纏います。オックスフォード大学でも各カレッジが数年に一度ボールを開催するのが通例です。750周年記念祭ということでチケットの値段も気合の入ったものでしたが、丁度友人が来訪する時期と重なったこともあり、折角の機会なので私も気合を入れてその友人と共に参加することにしました。

門を潜るとそこは別世界でした。はじめにシャンパンを受け取り、そのグラスを片手に氷の彫像の前で記念撮影を済ませます。この順番を待つ中でカレッジの友人達と鉢合わせ、談笑を交えました。上品に着飾り普段とは雰囲気の違いを彼らを目の当たりにし、こちらの気分も自然と高揚するのです。その後、会場を散策していると程なくしてディナーの時間となりました。通い慣れたディナー・ホールも、洗練や緊張の中に期待や熱気が包まれ、普段とは別の雰囲気を帯びていました。これがボールの妙と言うべきものなのでしょう。メニュー表やデザートに刻まれた750の数字がさり気なくこの晩が特別なものであることを演出していました。



ベリオール・カレッジ750周年記念ボールの様子

² YouTubeにも当日の様子が載せられています：<https://www.youtube.com/watch?v=KzA5sebImco>
動画の中で私も2度ほどさりげなく登場しています。

会場では軽食やドリンクの屋台が至る所に設置されており、また複数の部屋でコンサート、劇、ダンス、カジノといった催し物が同時並行で開催されていました。基本的に、軽食を挟みながらこれらを適当な順で回り、疲れたらティー・ルームで休憩する、ということを繰り返します。

初めてのボールは全てが新鮮で、驚きと発見の連続でした。その中で特に収穫であったことは、それぞれの催し物それ自体を楽しむことは勿論ですがボールの中心は「日常を離れパーティーの一員として振る舞うことを楽しむ点にある」という理解に至ったことです。³そうすると、なぜ服装や演出にあれほどの労力をかけるのかといった疑問が解け、また少し気取ってその雰囲気溶け込みゆったりと流れる時間に身を任せようという心持ちになりました。要は、ボールという存在やその楽しみ方について自分の中で合点がいったのです。初めて演劇鑑賞やスポーツ観戦に行く経験と似ているのかもしれませんが。

しかしこの後、調子に乗ってウィスキーを数杯飲み干してからダンスに興じたあたりで酔いが回り、残念ながらその後の記憶が余りありません。この晩DJを担当していたのは世界的に有名な音楽家マーク・ロンソンであり、彼の音楽で酔ったのならば喜んでいいのかもしれませんが。

5年間の留学生活を通して、このボールが最も格式の高いイベントでした。この体験を通して、テーブル・マナーや服装についても痛烈に意識するようになり、また、このような場をもっと余裕を持って楽しむことができるようになりたいと考えようようになりました。

バーンズ・ナイト



バーンズ・ナイト直前の様子（クレジット：MHG Still Pictures）

³ 役者が映画で与えられた役を演じることに共通する点もあるでしょうか。

ベリオール・カレッジでは年に3回、季節ごとのイベントが開催されます。クリスマス前に開かれるクリスマス・ディナー、1月下旬に行われるバーンズ・ナイト、そして5月上旬に催されるメイ・ディナーです。これらのイベントでは、普段のフォーマル・ディナーよりも豪華な食事やドリンクと共に、趣向を凝らした演出が参加者を楽しませます。例えばクリスマス・ディナーではクリスマスに関係したアクセサリーを身につけることが通例で、ゲストは大抵サンタクロース・ハットやトナカイの頭部を模した帽子を選びますが、中にはクリスマス・ツリー用の装飾品を全身に纏った強者も出現します。またクリスマス・ディナー中には「風船を天井まで飛ばす」という謎の競技が行われ、風船が天井の梁に届くと会場は大変な盛り上がりになります。

今回私が紹介したいのはバーンズ・ナイトです。この行事はベリオール・カレッジに限らず、スコットランドが産んだ詩人ロバート・バーンズの生誕を祝して彼の誕生日の1月25日前後に毎年英国全土で行われます。一般家庭でもスコットランドの伝統料理ハギスをメインディッシュとしたバーンズ・サパーと呼ばれるディナーを頂きます。よりフォーマルな形式ではバーンズの詩を朗読するなど様々なしきたりが入ります。これに加えベリオール・カレッジのバーンズ・ナイトではスコットランドの伝統的な楽器バグパイプの演奏と共にハギスが会場に持ち込まれ、これにカレッジ長がナイフを入れます。この演出の後にハギスが各テーブルに運ばれるという流れです。

ハギスを知らなかった私はその調理法⁴を事前に調べていました。少なくとも私にとってはあまり



り魅力的な料理に映らなかったのですが、折角の機会にと考えこれに挑戦したところ、心地よい歯応えとコク、またグレービーソースとの相性も抜群で、非常に美味しく頂きました。また、用意されていたウィスキーも上等なもので、これとハギスの相性もピッタリでした。やはりお酒はその土地の郷土料理に合うということでしょうか。それまでウィスキーに苦手意識を持っていた私が嘘の様にこの晩から進んでウィスキーを飲むようになったことを鮮明に覚えています。

ハギス（クレジット：MHG Still Pictures）

また、男性の中にはキルト（下写真その1参照）と呼ばれるスコットランドの伝統的な民族衣装を纏って参加される方も散見されました。これはウールでできたロングスカートのようなものであり、その下に下着を身につけないのが伝統的な着用方法です。私であれば終始落ち着かないだろうと思ったのはさておき、格式の高さとスコットランドの個性が調和した素敵な衣装でした。

バーンズ・ナイトの夜は長く、食事の後は場所を移動して簡易オーケストラの演奏をバックにスコティッシュ・ダンスに興じます。初心者も参加できるように講師がその場で踊り方を教授します。これは、個人やペアだけで踊るものではなく、（小学生の頃に体験するフォークダンスのように）ペアを基本としながらも多人数で協調して踊るため、非常に盛り上がります。スキップや回転など、動きがかなり激しくウィスキーの回りも進むため、この中で涼しい顔をしてダンスに興じ

⁴ <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8F%E3%82%AE%E3%82%B9>

るという技能が問われるのです。気が付けば毎年楽しみにする行事となり、またスコットランドの伝統に触れることのできる貴重な機会であるため、ここに紹介しました。



バーンズ・ナイトの様子（クレジット：MHG Still Pictures）



スコティッシュ・ダンスの様子その1（クレジット：MHG Still Pictures）



スコティッシュ・ダンスの様子その2（クレジット：MHG Still Pictures）

パンティング

最後に紹介するのはパンティング、いわゆる舟こぎ遊びです。オックスフォード大学とケンブリッジ大学ではこれが夏の風物詩となっており、観光としても有名です。このパンティング、重たい鉄



パンティングの様子

の棒で川底を押すという非常に原始的な方法で舟を進めるため、棒が重かったり、棒が川底に刺さったまま抜けなかったり、舟が真っ直ぐに進まなかったりと見た目以上に船の操作が難しいのです。その反面、悪戦苦闘している間に夢中になってしまう面白さがあります。また、川沿いに生い茂る木々や草花に囲まれ、小鳥に餌をやりながらゆったりと川沿いを流れる時間は格別です。

私はオックスフォードでしかパンティングをしたことがないのですが、ケンブリッジでは川が街の中心を流れるため、自然の中を流れるオックスフォードのコースとは異なる魅力があるようです。

終わりに

以上、駆け足でオックスフォードの催し物を紹介しました。これらの意義を学問知識の分野横断的な交換の場と捉える意見があります。しかし、政治家やビジネス・パーソンを志す方にとってはこれらの交流から得た人脈が直接役に立つこともあるでしょうが、少なくとも私の経験では直接自分の研究成果に結びついたということはありません。この点に関しては、他分野の研究者から話を伺うことが知的に面白いという、単純な魅力があるだけのように感じられます。

これらの催し物を通して、英国の伝統や文化に触れ、その美しさや機微を味わうことができました。このような五感を使った体験を通して英国に関する理解も深まったように思います。

加えて少し大げさに言えば、留學生活の中には住み慣れた母国とは異なる文化、生活環境、人間関係の中でゼロから自分を再構築していく過程が含まれます。同じ食材でも調理方法によってその味わいが異なるように、この過程は研究だけでなく自分の人格や振る舞いに大きな影響を与えたように思います。そこには、様々なバックグラウンドを持つ人々がいる中で「自分は誰でどのように振る舞うのか？」ということが意識・無意識の中で常に問われたことが大きかったように思います。異国の文化や人々の中に魅力や自分と共鳴するものを見出した際にそれを取り入れようと努めたり、逆に自国の美德を再確認するということが幾度となくありました。この中で英語は最低限の技能であり、それだけではほとんど何の役にも立ちませんでした。

このような人間的成長に関してオックスフォードで経験したイベントの数々は大きな役割を果たしたように思います。これに関連して、最近旅客機の中で鑑賞した映画Kingsman: The Secret Serviceからのセリフを引用して本稿の結びとしたいと思います：Manners maketh man.



Manners maketh man. (マナーが人をつくる。)